温故知新

縄文社会に戻れば人類は救われる

（一社）縄文道研究所
代表理事
加藤　春一 氏

縄文遺跡が世界遺産に登録

5月27日の主要新聞の朝刊に、北海道と東北3県の17カ所の縄文遺跡が世界遺産に正式に登録される方向でユネスコが勧告を出したという記事が掲載されていた。筆者にとっては30年来の縄文文化への取り組みがようやく具体化されたとの思いだ。ただし縄文文化は北海道、東北3県だけでなく、日本全国が対象とされるべきとの思いだ。尊敬する日本の代表的考古学者の小林達雄先生も、全日本の縄文遺跡を対象とすべきとのスタンスであり、今後の課題だ。ちなみに日本全国で約9万カ所の縄文遺跡があり、現在も毎年千カ所以上の発掘がある。日本は縄文遺跡の宝庫なのだ。

現在、世界は新型コロナウイルスの蔓延により人類の根源的な生き方が問われている。世界の人間の動きを止め、接触の機会を減らして、ウイルスの動きを抑え込むべく世界中の政府が必死に取り組んでいる。感染を防止する手段はワクチンの接種で、先進国を中心にワクチン接種による防衛策が実施されつつある。

現代社会は科学技術の発展により産業革命以降急激に人口が増加し、航空機の発達などで世界はまさに1つに結ばれた。21世紀に入ると情報通信革命によって世界は瞬時に人と人が結ばれる時代に突入した。このような時代のなかでの新型コロナの蔓延は、まさに人類全体の根源的な生き方を問うていると思う。世界的な哲学者で文明論者のイスラエル人、ユバール・ノア・ハラリ博士はこのように高度に発達した文明のなかで人類は「本来、狩猟や漁労時代に持っていた五感や六感を失った。人間がこれらの本能的な能力や感性を取り戻す必要がある」と論じている。

「故きを温ねて新しきを知る」という言葉がある。人類の歴史を振り返る視点として、人の動きを知ることは今後の世界を予見するうえで重要だ。世界の人口動態と、狩猟漁労採集生活時代の縄文時代の人口を考え、改めて人間の根源的な生き方を考えたい。

人口比較表

世界人口		日本人口			
1万年前	500万人～1,000万人	縄文時代	2万人		
紀元元年	2億人～3億人	縄文中期	26万人	弥生時代	59万人
1600年代	5億人	江戸時代	1,750万人		
1800年代	10億人	明治時代	3,481万人		
1900年代	16億人	大正時代	5,960万人		
1950年代	25億人	1950年	8,320万人		
2000年	65億人	2000年	1億2,697万人		
2020年	77億人	2010年	1億2,805万人		

この人口比較表からいえることは、世界は産業革命以降、また日本は明治維新以降に急速に人口が増えたということである。産業革命以前、世界の人口は約200年で、7.7倍強の77億人になり、日本は明治時代3,481万人が約3.6倍の1億2,800万人に急激に増加した。

ホモサピエンス（現生人類）がアフリカで誕生し、約20万年前にアフリカを出てヨーロッパ大陸に渡り、ユーラシア大陸を東方をめがけて移動し、最後に東端の日本列島に到達したのは約3万8,000年前であることが考古学の旧石器遺跡の発掘で判明している。発掘されたのは九州の熊本であるが、旧石器時代も北海道から沖縄まで広く遺跡が発掘されている。ホモサピエンスはユーラシア大陸を大自然や野生動物からのさまざまな生命の危険に晒されながら、約16万年かけて日本列島に辿り着いたのだ。海沿いにカヌーを使いながら辿り着いた海洋民族集団が存在していたという説もある。（沖縄・港川遺跡）。

日本列島に到着した旧石器人は、その後約1万年も続く氷河期を生き抜いてきた。旧石器人は打製石器を使用した狩猟漁労民族で、彼らはすでに厳しい自然のなかで生き抜く知恵を身に付けていたと推察できる。この旧石器時代人が約1万6,500年前に火と土と水を使用して縄文土器を作成したのだ。人類の最古の土器群としては青森県大平山元遺跡がある。草創期の土器からは炭素分析で魚介類の焦げが検出されているので、海水、淡水の魚を土器で煮炊きしていたといわれる。

縄文時代は土器の分類から、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6つの期間で約1万4,000年間続いた、世界のなかでも稀有なる長期、連続性をもった文化といえる。日本列島で旧石器時代のナウマン象、マンモス等の巨大動物を狩っていた狩猟民族のDNAを持つ人々が土器を発明し、狩猟を中心とした移動型から、竪穴式の定住型に進化したのが縄文人である。

失われた生命力を縄文道で取り戻す

縄文文化をつくり上げた縄文人の特徴を述べてみたい。現代日本の限界を打破する可能性を秘めているからである。哲学者で歴史学者でもあった故・梅原猛氏は、縄文文化は日本文化の源流で基層だが、この長期に形成さ

れた縄文魂が日本が艱難（かんなん）に遭遇したときの復元力になってきたと指摘している。多くの自然災害、疫病、戦争、経済危機を縄文時代～後弥生時代から約2,000年の間、日本人は乗り越えてきた。これはまさに縄文時代に形成された復元力であるが、この復元力とは何か考察したい。

まずは、「未知の世界を切り拓く挑戦力」が挙げられる。日本に約3万8,000年前に到着したホモサピエンスは、ユーラシア大陸に到着するまでに自然のあらゆる脅威や飢餓と戦い、自然動物から襲われる恐怖を克服してきた人々だ。彼らは楽園の日本列島で約1万年間の氷河期を潜り抜け、縄文土器を発掘したことで長期の縄文文化を形成した。縄文時代も気候の温暖差や自然の猛威と闘い、最終的に自然と共存・共生して生き抜く力を身につけた。この歴史的体験は、まさに未知の世界への挑戦心と挑戦力である。

次に、「創造力と開拓力」だ。縄文土器、土偶、狩猟採集道具、漁労の竿から仕掛け、竪穴式住居、四季折々の食材の確保、貯蔵、編み物、衣食住……等々、生活の全般が創意工夫の連続である。現代の世界的ファッションデザイナー、三宅一生もパリコレクションで縄文の服飾文化を発表したように、そのデザインは創造性に溢れている。

3つ目は、「ダイナミックなパワーとエネルギー」。創造的な分野に飽くことなく挑戦するダイナミズムは、そこに凄まじいパワーとエネルギーがないと縄文土器も土偶も住居も生み出すことができない。それは強烈な生き抜く「生命力」だ。ユバール・ノア・ハラリ博士が現代文明の利便性、快適性のために人間の五感、六感が失われていることを警告しているが、それこそまさに生き抜くための「生命力」なのかもしれない。

「世界を良くする―世界を救う」縄文道

縄文人と対比されるのが弥生人だ。農耕、鉄器、青銅器、古墳などを日本に技術導入し、現代人に近いとされる弥生人。縄文人との相互比較（キーワード）は次の通りである。

弥生型	縄文型
管理型	動態型
年功型	成果型
垂直型	水平型
就社型	就職型
固定型	変動型
規律型	自由型
効率指向	効果指向
適格性	適切性

日本社会はさまざまな問題を抱えているが、これらの解決にはリーダーが弥生型から縄文型に思考と行動を変える必要がある。縄文道で一貫して提唱しているように、縄文時代は①自然環境との共存、共生、②長期な平和社会、③女性の地位―diversity（多様性）実現社会、④富の平等性、が実現していた社会である。いわば日本は、縄文時代にユートピアを実現していたのだ。かかる意味で、世界は縄文文化を見直す時期にきているといえよう。

冒頭に述べたように、今年7月15日から7月31日に、北海道、東北3県の17カ所の縄文遺跡の正式登録される予定だ。登録が正式に認められれば、世界が縄文文化を見直す大きな歴史的転機になる。

縄文文化の意義と意味をアートと農業、林業を通じて16年間にわたって展開し、新潟県奥阿賀にコスモ夢舞台を展開している彫刻家の佐藤賢太郎氏がいる。縄文ミュージアムや縄文ストーンサークルをつくり、縄文の温泉もある。自然再生エネルギーの太陽光を使用した縄文ビレッジでもある。現在、3回目の奥阿賀アートフェスティバルを開催中だ。これまで世界からも多くの外国人が訪れているが、縄文文化が世界に広く知られるようになれば、世界から現代版縄文文化を堪能していただくために来訪されることを期待したい。

「故きを温ね新しきを知る」上で、縄文文化は世界性と普遍性をもった文化なので、環境問題や平和問題、経済格差問題を解決する、世界を救うヒントが隠されている。衣食住等の日本文化はすべて、縄文時代から長期にわたって環境と健康を考え抜いて徐々に完成させてきた日本の誇るべき結晶である。日本が今後世界に発信するのは精神文化と武術文化であろう。

筆者が注目するのは動と静のコンビネーションとしての合気道と座禅である。座禅は現在、「世界のための日本の心」の主催者である土居征夫代表がインターネットで座禅会を毎週木曜日の早朝に主催している。筆者も過去半年参加しているが、毎回奥行きが深いことを実感する。

アップルの創業者スティーブ・ジョブズや多くのカトリック司祭も座禅を組んでいるという。筆者は日本の陶祖・加藤藤四郎景正の末裔で、陶祖が曹洞宗開祖・道元禅師と一緒に当時の南宋を訪問して最新の陶器の技術を学んだことから座禅には関心を寄せてきた。静の精神文化として期待したい。

「動」の武術では、日本の柔道、剣道、空手道のすべての武術を保身術として完成させたのが武田惣角と植芝盛平だ。筆者はいま、真中流合気道師範・中村義一先生の下で修業中だ。中村師範は、アメリカ大陸で約20年にわたって主にアメリカ人とカナダ人に合気道、空手を教授してきた。現在、世界に合気道を習う人口が約140万人いて、半分が女性と聞く。合気道が保身術で相手の力と気を極めて自然体で柔軟に使う術は縄文の平和思想に結びつく、日本武術の完成形だと思う。

世界最古の縄文文化を源流、基層とした衣食住文化、精神文化、武術文化は、今後世界にますます発信され、そこに流れる平和、環境、健康な思想が「世界を良くする―世界を救う」という1つの方向性をもって貢献できると思う。まさに縄文文化の精神に根差す縄文道は温故知新になると確信する。

PROFILE

加藤　春一（かとう・はるいち）

（一社）縄文道研究所 代表理事・㈱APIコンサルタンツマネージングパートナー。1944年満州大連にて日本の陶祖 加藤藤四郎景正の末裔（23代）として生まれる。1968年上智大学経済学部卒業後 大手商社・日商岩井にて資源ビジネスに30年間従事。西豪州代表、ベルギー・ブリュッセル製鉄原料部門欧州代表、この間5大陸56カ国訪問。1998～ 2016年、東京エグゼクティブ・サーチ勤務（2000年から2008年まで社長）、世界のサーチファームITPグループ日本代表。2016年（一社）縄文道研究所創設 代表理事に就任。著書として、『能力Qセルフプロデュース』（ビジネス社）、『グローバル人財養成塾』（生産性出版）、『世界一美しいまち―オーストラリア - パースへのいざない』（「国会図書館永久保存版」。